

トマトかいよう病のハウス内での発生増加に注意しましょう。

近年、トマトかいよう病の発生が県内各地で見られ、一部のほ場では大きな被害が出ています。平成25年産冬春トマトでも育苗期や定植約2か月後の早い時点から発生が見られました。本病は、細菌（*Clavibacter michiganensis* subsp. *michiganensis*）による病害で、効果的な防除対策が限られるため、予防と発病株の早期発見が重要です。本病の特徴をよく知るとともに、ほ場内をよく観察し、本病の予防を心がけましょう

【発生のしくみと特徴】第一次伝染は種子伝染と土壌伝染（植物残渣）であり、第二次伝染は芽（葉）かきや誘引などの管理作業によってできた傷口からの侵入である。

また、発病適温は25～28℃で、多湿条件下で発病しやすい。

【病徴】トマトの茎、葉柄、葉、果実に発生する。

〈茎の内部組織が侵される場合：写真1～3、果実表面が侵される場合：写真4〉



写真1（左）

下葉の周縁がしおれ、後に乾燥して上方に巻き上がり、葉脈の間が黄化し小葉全体が褐変枯死する。

萎凋性の症状は、生育初期に感染した場合、管理作業で直接維管束に病原細菌が感染した場合に発生する。



写真2

茎や葉柄の維管束が褐変する。



写真3 病徴が進むと髓部も褐変して粉状となり空洞となる。



写真4 果実に発生した鳥目状病斑

幼果期に降雨が多くて湿度が高く、ほ場内の病原細菌密度が高い時に発生する。

【防除対策】

- (1) 循環扇や暖房機利用による通風を行い、植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- (2) カスミンボルドーや銅シン水剤を散布し、予防に努める。
- (3) 発病が疑われる場合には、簡易診断キット（Agdia社製 ImmunoStrip等）を活用し、早期発見に努める。
- (4) 発病株は速やかに抜き取り処分する。発病が疑われる株の管理作業は、他の株と別にするか最後に行う。
- (5) 汁液伝染を防ぐため、曇雨天時や早朝等、茎葉が濡れている時間に摘芽や摘葉等の管理作業は行わない。
- (6) 摘葉、摘果にハサミを使用する場合には、一定株数毎にハサミの刃をこまめに消毒する。
- (7) 発生ほ場では、栽培終了後に株の根域まで丁寧に抜き取り、ほ場外で処分し、土壌消毒を実施する。また、使用した資材等についても資材消毒を行う。

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。また、当センター携帯サイト（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用下さい。

（TEL 028-626-3086）